

氏名	野田 拓志
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博 甲第 6229 号
学位授与の日付	2020年9月25日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目	RELATIONSHIP BETWEEN PREOPERATIVE FOVEAL MICROSTRUCTURE AND VISUAL ACUITY IN MACULA-OFF RHEGMATOGENOUS RETINAL DETACHMENT: Imaging Analysis by Swept Source Optical Coherence Tomography (黄斑剥離を来した裂孔原性網膜剥離における術前の網膜外層構造と術後視力との関係: 波長掃引型光干渉断層計による画像を用いた検討)
--------	--

論文審査委員	教授 大内淑代	教授 光延文裕	准教授 安原隆雄
--------	---------	---------	----------

学位論文内容の要旨

近年、波長掃引型光干渉断層計 (SS-OCT) の発展により、黄斑剥離を来した裂孔原性網膜剥離 (RRD) における術前の網膜外層構造でも微細に解析することが可能となった。そこで SS-OCT を用いて RRD 術前の網膜外層構造を観察し、術後視力予後との関連を検討することを今回の目的とした。

2016年1月から12月に岡山大で手術を行った、黄斑剥離を来した RRD 42例42眼を後ろ向きに検討した。術前に SS-OCT を用いて撮影した網膜外層構造のうち、ellipsoid zone (Ez) および外境界膜 (ELM) の連続性と術後視力との関係を検討した。

術前に Ez と ELM が共に連続していた群 (A 群) の術後最高矯正 logMAR 視力 (-0.05 ± 0.04) は、ELM のみ連続していた群 (B 群; 0.16 ± 0.16)、どちらも連続していなかった群 (C 群; 0.80 ± 0.37) に比べて有意に良好であり (順に $p=0.047$, $p<0.001$)、B 群は C 群に比べて有意に良好であった ($p<0.001$)。

術前の網膜外層構造は、黄斑剥離を来した RRD の術後視力の予後予測因子となる可能性がある。

論文審査結果の要旨

眼科診断における光干渉断層計 (OCT) の貢献は著しく、さらに近年、波長掃引型 OCT (swept source: SS-OCT) の発展により高解像度高速化が実現された。

本研究では、黄斑剥離を含む裂孔原性網膜剥離 (RRD) における網膜外層構造を SS-OCT で観察し、術後視力予後因子について後向き研究を行った。RRD 患者 42例について、術前 OCT 所見として外境界膜 (ELM) と ellipsoid zone (Ez) の連続性と術後視力 (logMAR) との関係を経験的に解析した。その結果、ELM と Ez が共に連続していた患者群が、ELM のみ連続な群、ELM, Ez 共に非連続な群と比較し、有意に術後視力が良好であった。

委員からは、術者・術式による予後の差、網膜剥離の原因や年齢因子の関与、OCT 所見の定量化について質疑があった。本研究者は、これまでの文献や臨床経験に基づき、詳細かつ的確に考察を述べた。

本研究は、網膜剥離の画像診断所見と予後との関係について重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。